

# 第21回大会報告記

中 窪 靖

10月26日（土）明治学院大学において、第21回日本アイリス・マードック学会が開催された。当日は4つの研究発表と、1つの特別講演が行われた。中でも、今年がマードック生誕100年に当たる記念の大会となるため、第一線でマードック研究を牽引してこられたアン・ロウ先生を特別講演の演者として招聘した。また、もう一人、神学の研究者であるキム・ジンヒョク先生を韓国より招聘した。いずれも、ポール・ハラール会長のご尽力のおかげで実現にこぎつけたものである。

まず、研究発表であるが、いずれも刺激的な内容であった。一つ目の「*A Severed Head*における錯綜する愛」では、作品の中の複雑な人間関係を、近親相姦を中心に解き明かそうとする試みであった。その中心におかれたのは、エディプスコンプレックスと、この作品のタイトルにもなっている「切られた首」の象徴である。二つ目の「アイリス・マードックの作品に読むブロンテ的要素」では、一見関連が薄いように見えるマードックとブロンテ姉妹との関係をストーンマンとガナー＝ラウスという二人の批評家の論述を基に解

き明かそうとした。三つ目の「Murdoch and the classics: a reading of *An Accidental Man*」では、フィオナ・トムキンソン先生の原稿を代読する試みを、ウエンディ中西先生が買って出て下さり、これまでにない研究発表が実現した。トムキンソン先生は極めてユニークな発想で *An Accidental Man* を分析してみせた。一見したところ、その中にギリシャの哲学・ギリシャ演劇の要素を見るのは難しい。しかしながら、*Jackson's Dilemma* の中で語られる「書物とは、少なからず古代世界の息吹きの中にどっぷりとつかっているものだ」という言葉を手掛かりに、筆者はこのユニークな分析を展開した。四つ目の「*Seeing the Beauty of the Divine: A Murdochian Approach to Religious Art with Special Attention to Iconography*」では、神学でいうところの図像学の視点で、マードック哲学を分析してみせた。マードックの芸術と宗教と道徳とからなる形而上学は、たとえ彼女がキリスト教徒のように図像学に関心を向けていないことを差し引いても、現代に生きる我々が宗教芸術を理解する手掛かりを与

えてくれるというものであった。

一方、アン・ロウ先生による特別講演は、キングストン大学でアーカイブ・プロジェクトに関わり、マードックが生前に残した資料の整理・編纂の活動を担ってきた研究者ならではの、マードック学徒にとっては垂涎の的と言ってもいい興味深いお話であった。特に、すでに一部は書籍の形で世に出ているが、今なお4000通もの未公開の私信があるという事実が熱っぽく語られた。合わせて、現在の今の一瞬一瞬もアーカイブプロジェクト

トのメンバーが日々資料の整理に取り組んでいることも紹介された。また、それに加える形で、マードック研究の最前線では、現代の政治的社会的な状況がそのコンテクストとなっているとの指摘もあった。

今回も、会は終始和やかな雰囲気の中で進行したので、会員相互の親睦も図れたと思う。引き続き、次年度に向けては、現在新しい企画を模索中であるので、それを含めて実り多い会になることを期待したい。